

静岡の高校サッカー 戦後の球跡

50

1972年(昭和47年)度の東海総体で、静岡工は赤いユニホームで登場した。慣れ親しんできた黄色のユニホームではなく、新ユニホームは「静工じゃない」との指摘を受けたと、GKだった清水佐平(静岡ガス)はサッカー部記念誌『60年の足跡』に記している。だが、3年後の75年度全国選手権で準優勝し、「赤の静岡工」はすっかり定着する。

黄色からの変身の裏には、主将を務めた高橋俊光(アカツキコーポレーション)の赤への強い思い入れがあった。あこがれのジョーシ・ベストが所属したマンチエスター・ユナイテッドのチームカラーは赤であり、サッカー漫画の「赤き血のイレブン」が一世を風靡していたこともあって、赤にひかれ、イメーシ一新を申し出た。「心機二転を図りたかった」と、高橋は当時の思いを語る。

「赤の静岡工」がなじみの始めた74年度、15年間にわたり指揮を執った松永弘道(焼津市在住)が静岡高に転出、その静岡高を率いていた松本博之(焼津市在住)

静岡工 ④

【1974年度全国選手権優勝】	【選手権】
GK 長野 野村 山石 登	兼 仁彦 美訓 美孝 満 弘 暁 彦
FB 青木 渡石 浦 大岸 吉田 井合	晴 敏 良 正 和 志 文 信
HB 平 落	
FW	



イメージを一新した赤のユニホーム
(1975年度全国総体開会式から)

が新監督の座に就いた。松本には温めていたフォーメーションがあった。トーとの手応えを感じ取ったツブ2枚の4・4・2である。古典的なWMから4・2・4、さらに4・3・3と変遷する中で、前線に2人を据えるフォーメーションを模索してきた。新任地なシステムを抵抗感なく受け入れた。といっても、6月

2の採用に踏み切った。選手の個性を見極め、いけるトーとの手応えを感じ取ったからだ。

選手たちは、どう受け止めたか。別に違和感を感じなかった(吉田弘)日本サッカー協会)といい、新たなシステムを抵抗感なく受け入れた。といっても、6月

黄から赤 イメージ一新

の全国総体県予選はよもやの1回戦敗退に終わった。だが、秋の全国選手権県予選は成長した姿を見せた。1次トーナメント、リーグ戦を勝ち抜き、ベスト4による決勝トーナメントに駒を進めた。4強対決はまず藤枝東と対戦、1-0で競り勝って決勝に進んだ。

決勝は全国選手権初出場が懸かっていた。相手は清水東。前半3分に先手を取られた。だが17分、右からチャンスをつくり、攻め上がった渡仲敏美(現・鈴木茶業)が、20分のシュートをゴール右隅に決めて追い付いた。しかし、38分に決勝点を奪われ、1-2で涙をのんだ。

念願の選手権初出場を目前にしたが、敗退だったが、布陣の大半を占めた2年生が中心になって、翌75年度に夢を実現する。

(敬称略)
(スポーツライター・加藤訓義)